

第3回 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー 対話型鑑賞ファシリテーター勉強会

日時： 2012年 1月24日(火) 18:30 ~ 21:30

場所： 東京都美術館 リニューアル準備室

実施目的：

- 勉強会を通しヴィジュアル・シンキング・ストラテジー (Visual Thinking Strategies 以下VTS)の手法を用いた対話型鑑賞のファシリテーターの経験値を高める。
- 豊かで深い会話に繋がる作品、シークエンスの妥当性を検討する。
- 懇親を深めながら、今後の勉強会や実践の場の情報交換を行う。

実施内容：

- ファシリテーターを事前に決め、3作品のシークエンスを作りVTSを行う。
- 時間は1作品15分程度×3作品で計45分程度。
- 実施後、参加メンバーとディスカッション(15分程度)を行う。

参加者： 5名

<ファシリテーター >

作品1

「黒い半仮面をもつピエロ」

パブロ・ピカソ

1918年

カンヴァス、油彩

92×73cm

ニューヨーク近代美術館

作品2

「Spinning Room (紡績機)」

LEWIS HINE

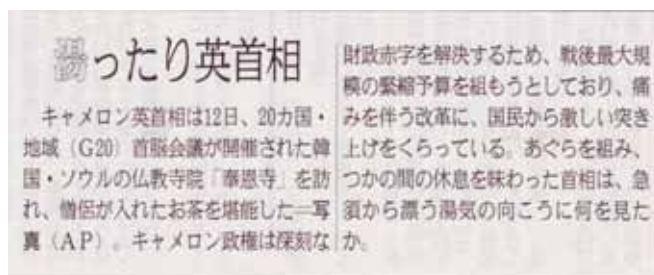
1900年

Gelatin silver print

37.9×48.5cm

作品3

2010年11月12日ソウル・サミット(G20) 産経新聞



VTS 対象設定

美術作品を見ることに慣れている層

テーマ

働く人

シークエンスの意図

ジェンダー、ナショナリティを意識しながら、油彩、白黒写真、カラー写真という様々な技法の作品を並べた。

- 1 作品目: 導入のため、表情、表現性の強いものを選択(油彩)
- 2 作品目: 写真の作品への挑戦。(モノクロ写真)
- 3 作品目: 報道写真への挑戦。(カラー写真)

VTS 後に写真に付随する記事を読んだ場合、写真の印象に違和感があるかどうか。

VTS ファシリテーター側の所感

パラフレーズの仕方をもう少し工夫したい。VTS 実践対象が美術鑑賞のレベルが比較的高い為、今後は子どもを対象に実践してみたいと考えている。

美術館などでのギャラリートークは毎回課題となるシークエンスの設定と、

場を想定する事への難しさを感じたが、どのような対象者であれ、

初対面の人に向けてシークエンスを作る際に、どこまで想定できるかも考えて行きたい。

参加者からの意見

- 丁寧なパラフレーズにより、聞いてもらっている、という心地よさが感じられた。
- 参加者に応じてパラフレーズの最後の方に出てくるまとまった形容詞を上手に活用するとよりよいと感じる。パラフレーズそのものの分量の加減も工夫できる。
- 周りの様子を伺いすぎることによって不要な間が生まれてしまうのを防ぐ為、次の作品へと切り上げる際は、ファシリテーターのペースで動いてよいと思う。

< ファシリテーター >

作品1

「解剖学の少年」

四谷 シモン

1983年

紙、木、ガラス、毛、布、皮

縦139.7×横59.9×深27.7cm

作品2

「濱田室(梁)」

50年目の工芸館を撮る

『大原美術館 Artis Meets Kurashiki vol.8

斎城卓 50年目の工芸館を撮る』シリーズより

斎城 卓

2011年

写真

サイズデータ無

作品3

「萌黄地透文羅裂地」

北村 武資

2010年

絹 / 織(羅)

72×519.4cm

VTS 対象設定

VTS、対話型鑑賞教育を学んでいるメンバー
(美術に触れる機会が多く、VTSの経験もある。

または、美術史の知識を持っているが、それらにとらわれない鑑賞が可能な層。)

テーマ

「光」や「リズム感」が感じられるもの

シークエンスの意図

- 1 作品目: 人体の具象表現に好き嫌いがはっきり分かれる。ウォーミングアップとして、発言が出やすい作品。
- 2 作品目: 光と陰、縦横に走るラインの構成からリズムが感じられる作品(3 作品目への前座的な要素を含む) モノクロ写真作品で具象ではあるが、より構造的に鑑賞することを促すことができる。
- 3 作品目: 1 作品目と2 作品目、特に2 作品目を鑑賞することで、構造に着目できる作品。

東京国立近代美術館工芸館の所蔵作品を活用しながら、物語性に依拠しない作品鑑賞への挑戦を試みた。立体を平面で鑑賞することにより、所蔵作品がどうシークエンスに活かせるかを検討するため、組み立ては3 作品目から行った。

また3 作品目とも齋城卓氏撮影の写真を使用し、1 作品目と3 作品目の物撮り写真は、作品の代替物として考えられるか? 写真になった時点で既にフィクションであり、カメラを使って「見る」ことを取り出す写真の力を借りて、「見る」とは何かを意識的に考えられるような流れを作った。

VTS ファシリテーター側の所感

出来る限り中立的な立場を心がけた。参加者の発言をリンクする際、以前挙がった意見を引っ張られることで、恣意的なパラフレーズにならないよう留意した。3 作品とも、ストーリーのないものをあえて選んだが、工芸(特に立体)を画像投影し VTS で扱うことに難しさを感じていたものの、想定以上に面白いセッションとなった。

参加者からの意見

- シークエンスの設定が興味深く、楽しめた。VTS に慣れ始めている対象者には効果的かと感じるが、VTS の意図や目的をきちんと説明し理解しないと難しいかと思う。
(作品の中で指し示す事ができる具体的な箇所が拾い出しにくい)
- 1 作品目が、上から覗き込んで撮影しているように見える、という発言があった。そこから2 作品目に移った時に逆に、下から見上げた格好での撮影という点に繋がった。そのことが、空間そのものよりも撮影方法やその意味にまで考えるきっかけとなった。
- 3 作品目の「織」は、技法そのものや作品の素材よりも、作品の鎖に見える印象や光の色合いから鎖がキラキラして綺麗、というような鑑賞に浸れた作品。
実際には工芸である事を知り、展覧会で実物を見る事が楽しみな作品となった。